

『方丈記』の用語と文体に関する一考察

—『古今和歌集』仮名序の影響をめぐって—

青 木 毅

一 問題の所在

大福光寺本『方丈記』^①には、副詞「いはば」が次のように二例用いられている。

○ソノアルジトスミカト無常ヲアラソフサマ、イハハアサガホノ

露ニコトナラズ。(五八五^⑧)

○コ、ニ六ソヂノ露キエガタニヲヨビテ、更スエバノヤドリラム

スベル事アリ。イハハ旅人ノ一夜ノ宿ヲツクリ老タルカイコノ

マユライトナムガゴトシ。(六〇三^⑩)

*以下、大福光寺本『方丈記』の用例の文頭には、○印を付すこととする。

いずれも、へ仮に言うならばへたとえて言うならばへの意で用いられており、文末における比況表現と呼応している。このような副詞「いはば」は、現代ではさまざまな文章において用いられ、どちらかと言えばありふれた用語である。

ところが、『方丈記』の時代においては必ずしも使用頻度の高い用語ではなかったと見られ、次に掲げた院政・鎌倉時代の仮名(交じり)文には用例を見出すことができない。^③

今昔物語集、打聞集、古本説話集、宇治拾遺物語、宝物集(宮内庁書陵部本)、閑居友、古事談、撰集抄、十訓抄、古今著聞集、沙石集、保元物語、平治物語、平家物語(延慶本・寛一本)、水鏡、篁物語、唐物語、海道記、東関紀行、十六夜日記、とはすがたり、徒然草

一方、同じ作者(鴨長明)の作品である『発心集』には、次のように四例の「いはば」が用いられている。^④

・若し又、ふたたび問ふに便りなきをば、所の名、人の名を記さず。云はば、雲を取り、風をむすべるが如し。(四五^⑤)
・海に求め、山に得たる味ひも、一夜へぬれば、悉く不浄となりぬ。いはば、描ける瓶に糞穢を入れ、くさりたるかはねに錦を

まとへるが如し。(一八二③)

・ただ、流来生死の夢の内、因縁おのづから和合して、仮に業報の形の顕はれたるばかりなり。云はば、旅人の一夜の宿を借るがごとし。(三〇〇⑩)

・生れ死ぬるけがらひは、いはば仮のいましめにてこそあらめ(一九六⑬)

四例とも意味は『方丈記』と共通しており、そのうちの三例は文末の比況表現と呼応している。

右のような状況から判断すると、「いはば」は院政・鎌倉時代の仮名交じり文においては必ずしも一般的な用語ではなかったと考えられ、鴨長明が何らかの理由で個人的に用いていたものではないかと推測される。

副詞「いはば」の使用例は、鴨長明が用いる以前にもあるのだろうか。もしあるとすれば、長明はどのような文献からいかにして自らの文章に取り入れることになったのであろうか。本稿では、この問題の検討を足掛かりとしつつ、『方丈記』の用語と文体の内実について追究したいと思う。

二 平安時代における副詞「いはば」の使用状況

まず、宮島達夫編『古典対照語い表』(一九七一年、笠間書院)には、『方丈記』(二例)以外に用例数の記載がない。そこで、同書

で取り上げられていない作品も含めて索引類を調べてみると、『花物語』に次の一例が見出された。

・世中の十が九は、皆鈍み渡りたり。いはば諒闇ともいひつべし。(卷第三十・下三三六⑥)

また、『新編国歌大観 CD-ROM 版 Ver. 2』(角川学芸出版)を用いて検索すると、『方丈記』以前の作品では、『古今和歌集』仮名序において次の四例が見出された。その用法は、『方丈記』と同様に文末の比況表現と呼応している。

・文屋康秀は、詞はたくみにて、そのさま身におはず。いはば、商人のよき衣着たらむがごとし。(二六⑭)

・宇治山の僧喜撰は、詞かすかにして、始め終りたしかならず。

いはば、秋の月を見るに暁の雲にあへるがごとし。(二七④)

・小野小町は、古の衣通姫の流なり。あはれなるやうにて、つよからず。いはば、よき女のなやめるところあるに似たり。(二八①)

・大友黒主は、そのさまいやし。いはば、新負へる山人の花の蔭に休めるがごとし。(二八⑧)

現時点では、平安時代の和文における用例は右の五例であり、全体的に用例は乏しいが、他の作品に比べて言語量が僅かである『古今和歌集』仮名序に、四例もの用例が集中している点には注意される。

次に、漢文訓読文における「いはば」の使用については、築島裕『平安時代の漢文訓読語に就きての研究』(一九六三年、東京大学出

版会)第六章第四節「古今集仮名序と漢文訓読」の中で、『古今和歌集』の仮名序と同真名序とが相互に近似していると思われる箇所を引用した上で、次のように述べられている。

この部分の「仮名序」の文の中にさへも、訓読には一般に用ゐられないはずの、助動詞の「けり」や副詞「いはば」などが存し(傍線青木)、何れも「真名序」の訓読語そのまゝとは考へられない。

すなわち、『古今和歌集』真名序(漢文体の序文)には「いはば」と訓読し得る漢字表記が認められず、そのような、真名序になくかつ漢文訓読でも一般に用いられない「いはば」を、仮名序の作者とされる紀貫之が独自に用いたことになる。

「ところで、紀貫之作とされる『新撰和歌集』の漢文体の序文には「いはば」と訓読し得る漢字表記は認められない。推測の域を出ないことではあるが、使用語として「いはば」を持つていた紀貫之も漢文体の文章の中では用いなかったとも考えられる。

また、築島裕編『訓点語彙集成』(二〇〇七～〇九年、汲古書院)には、副詞「いはば」は次の一例が掲出されているのみである。

・謂「イハ、」(大日経義釈 延久六年 朱点「宝幢院点」十墨点 「仮名点・承保二年」)

このように、平安時代の漢文訓読文においても「いはば」の用例は乏しいことが窺われる。

ただし、漢文訓読文には「タトヘバ…ゴトシ」という表現形式が見られ、その意味するところは「例えて言わば…如し」ということであろう。したがって、「いはば…ごとし」は、漢文訓読文に直接用いられることはほとんどないが、その文体的性質は漢文訓読的であるとも言えよう。

三 『方丈記』における副詞「いはば」の出自

前項までの検討によれば、『方丈記』以前の文献で副詞「いはば」の用例が見出されるのは、『古今和歌集』仮名序『栄花物語』および『大日経義釈』(延久六年)であった。『方丈記』の「いはば」は、これらの文献における用例に影響を受けて用いられたものなのだろうか。それとも、それらとは無関係に鴨長明が独自に用いたものなのだろうか。この問題を考察するに当たっては、鴨長明作とされる『無名抄』における次の記述が参考となる⁸⁾。

古人云はく、「かなに物かく事は、歌の序は、古今のかなの序をほんんとす。日記は、おほかゞみのことざまをならふ。和歌の詞は、伊勢物語、ならびに後撰の歌の詞をまなぶ。物語は、源氏に過ぎたる物なし。みな此れらをおもはへて書くべきなり。(略)」

右のように、「古人」の言葉を引用するかたちで、仮名文を書く場合、和歌集の序文は『古今和歌集』の仮名序を、日記は『大鏡』を、和歌の詞書は『伊勢物語』と『後撰和歌集』を、物語は『源氏』

物語』を手本にして書くべきことが述べられている。

『方丈記』は文学史の上では〈随筆〉や〈記録文学〉などと分類されることがあるが、いずれにせよ、右の引用文の中では、『方丈記』のようなジャンルの作品を執筆する上で手本となる文献は挙げられていない。しかしながら、和歌集の序文の場合であるとは言え、『古今和歌集』仮名序が仮名文を書く際の手本の一つとして挙げられていることには注目される。すなわち、鴨長明は『古今和歌集』仮名序について、文章としての価値を高く評価していると考えられるのである。したがって、『方丈記』とは文学作品としてのジャンルを異にしているとは言うものの、『古今和歌集』仮名序が長明自身の用語や文章に何らかの影響を与えていたとしても不思議はないであろう。

このように、平安・鎌倉時代において使用例の極めて乏しい副詞「いはば」が、多かれ少なかれ影響関係の想定される文献（『古今和歌集』仮名序と『方丈記』）において、用法を等しくして用いられているということから考えると、『方丈記』における「いはば」は『古今和歌集』仮名序の影響を受けて用いられている可能性が高いと思われる。

ところで、『方丈記』における「いはば」が『古今和歌集』仮名序の影響で用いられているとすれば、それ以外に用語や表現に関して影響を受けている点はないのだろうか。その目で両文献に共通す

る表現を探してみると、たとえば次のようなものが認められる（ここでは複数の語の組み合わせに成る表現に限ることとする）。

- ・世の中にある人、ことわざ繁はやきものなれば、（一七②）
- 世中ニアル人ト栖ト又カクノゴトシ。（五八四③）
- ・猛あやき武士ものぶの心をも慰なぐさむるは歌なり。（一七⑦）
- ・長柄ながへの橋もつくるなりと聞く人は、歌にのみぞ心こゝろを慰めける。（二四⑦）
- ソノヨハヒコトノホカナレド、心ヲナゲサムルコトコレヲナジ。（六〇七⑨）
- 勝地ハヌシナケレバ、心ヲナゲサムルニサハリナシ。（六〇八④）
- ・草くさの露つゆ、水みづの泡うたを見てわが身を驚おどき、（二四①）
- 朝ニ死ニタニ生ル、ナラヒ、水ノアハニゾ似リケル。（五八五⑤）
- ・時を失うしなひ、世にわび、親おやしかりしも疎とほくなり、（二四②）
- 時ヲウシナヒ世ニアマサレテゴスル所ナキモノハ、（五九一⑤）
- ・古いにしへのことも、歌の心をも知れる人、わづかに一人ひとり二人ふたりなりき。（二五⑫）

○イニシヘ見シ人ハ二十人ガ中ニワヅカニヒトリフタリナリ。
(五八五③)

・たとへば、絵にかける女を見て、いたづらに心を動かすがごとし。
(二六④)

○物ウシトテモ心ヲウゴカス事ナシ。(六一二⑧)

・たとへば、絵にかける女を見て、いたづらに心を動かすがごとし。
(二六③)

○タトヘバ、スゞメノタカノスニチカヅケルガゴトシ。(六〇一③)

・いはば、よき女のなやめるところあるに似たり。(二八①)

○朝ニ死ニタニ生ル、ナラヒ、水ノアハニゾ似リケル。(五八五⑤)

○世ニシタガヘバ身クルシ。シタガハネバ狂セルニ、タリ。(六一二③)

○アカ月ノアメハヲノツカラコノハフクアラシニタリ。(六〇九③)

・郭公を聞き、紅葉を折り、(二九⑨)

○夏ハ郭公ヲキク。(六〇六②)

・空しき名のみ、秋の夜の長きをかこてれば、かつは人の耳に恐

り、かつは歌の心に恥ぢ思へど、(三〇④)

○ヨドミニウカブウタカタハ、カツキエカツムスビテ、ヒサシク
トマリタルタメシナシ。(五八四②)

・真拆の葛長く伝はり、(三〇⑩)

○マサキノカヅラアトウツメリ。(六〇五⑩)

右に挙げた表現は、必ずしも用例の稀少なものではないため、両文献の影響関係を証明するキーワードとしてはいささか弱い面があることは否めない。しかしながら、『方丈記』における「いはば」が『古今和歌集』仮名序の影響を受けて用いられているとの見方を補強する材料にはなると思われる。

四 『方丈記』における歌語の使用状況

ここで、『方丈記』の文体を構成する要素について整理しておきたい。

従来『方丈記』は、和文語・漢文訓読語が縦横に交用され、対句的表現が多用されていることから、いわゆる「和漢混淆文」の典型として認識されてきている。そして『方丈記』のこのような文体の形成には、四六駢儷体で書かれた慶滋保胤の「池亭記」が著しい影響を与えたと考えられている。

また、叙述や描写の中には、先行する和歌の表現を借用したり、著名な歌語的表現を援用したりしながら、それとは明示せず（つまり引用の形式を取らずに）自分の文章の中に溶け込ませている箇所が存している¹¹⁾。

このように、『方丈記』の文体を構成する要素としては、少なくとも①和文語・②漢文訓読語・③歌語的表現・④对句的表現が認められ、①③は和文的要素、②④は漢文的要素と捉えることができよう。ところで、『方丈記』の文章中には、右に述べたような、具体的な和歌を踏まえた結果として用いられた歌語的表現（③）とは別に、通常散文には用いられず基本的には和歌に用いられるはずの、いわゆる歌語が少なからず用いられており、すでに「家苞」「帰るさ」「死出の山路」（「川も」狭に）「たまゆら」「外山」「藤波」「都の手振り」の使用が指摘されている。地の文にそれとなく用いられているこのような歌語は、和漢混雑文々の典型と見なされている『方丈記』の文体を構成する要素として、どのように位置づけることができるのであろうか。

すでに指摘されている用語以外では、『方丈記』の地の文に用いられている歌語として、次の諸語を挙げるができる。

「うたかた（泡沫）」

○ヨドミニウカブウタカタハ、カツキエカツムスピテ、ヒサシク
トマリタルタメシナシ。（五八四②）

『古典対照語い表』所載の散文作品（『方丈記』以前）では、『源氏物語』に一例「うたかた」が用いられているが、それは和歌中の例である¹²⁾。

・ながめする軒のしづくに袖ぬれてうたかた人をしのはざらめや

（真木・三二四〇⑮）

『八代集総索引』によれば、『後撰和歌集』に二例（515・904）使用例がある¹³⁾。

・思ひ河絶えず流る、水の泡のうたがた人にあはで消えぬや（後撰）515

・降り止めば跡だに見えぬうたかたの消えてはかなき世を頼む哉（後撰）904

ところで、右の五一五番歌では、「うたかた」とともに「河」「絶えず」「流る」、「水の泡」「消え」の諸語が縁語的に用いられているが、これらは『方丈記』冒頭部においても用いられているものである¹⁴⁾。

○ユク河ノナガレハタエズシテ、シカモ、トノ水ニアラズ。ヨド

ミニウカブウタカタハ、カツキエカツムスピテ、ヒサシクトッ
マリタルタメシナシ。（中略）朝二死ニ夕ニ生ル、ナラヒ、水
ノアハニゾ似リケル。

このことは、『方丈記』の文章が、冒頭からすでに歌語もなじむような文体になっていることを象徴的に示しているようにも思われる。

「つまき（爪木）」

○林ノ木（軒）チカケレバ、ツマ木ヲヒロウニトモシカラズ。（六〇五⑨）

『古典対照語い表』所載の散文作品（『方丈記』以前）には「つまき（爪木）」は見られない。

『八代集総索引』によれば、『後撰和歌集』に一例（1083）、『新古今和歌集』に三例（927・1634・1637）使用例がある。

・住みわびぬ今は限と山里につま木こるべき宿求めてん（後撰）1083

・旅寝する蘆のまる屋のさむければつま木こりつむ舟いそぐ也（新古今）927

・立ち出でてつま木おりこし片岡の深き山路となりけるかな（新古今）1634

・いまはとてつま木こるべき宿の松千代をば君と猶いのる哉（新古今）1637

「うつせみ（現身）」

○アキハヒグラシノコエミ、ニ満り。ウツセミノヨラカナシムホドキコユ。（六〇六③）

『古典対照語い表』所載の散文作品（『方丈記』以前）では、『源氏物語』に二例「うつせみ（現身）」が用いられているが、いずれも和歌中の例である。

・空蟬の世はうき物と知りにしをまた言の葉にかゝる命よ（夕顔）□一四二⑦

・羽衣のうすきにかはるけふよりは空蟬の世ぞいとかなしき（幻）□四一九八③

『八代集総索引』によれば、『古今和歌集』に一例（831）使用例がある。

・空蟬は殻を見つ、もなぐさめつ深草の山煙だにたて（古今）831

○又フモトニ一ノシバノイホリアリ。スナハチコノ山モリガラル所也。（六〇七⑦）

『古典対照語い表』所載の散文作品（『方丈記』以前）には「やまもり（山守）」は見られない。

『八代集総索引』によれば、『後撰和歌集』に三例（50・384・761）、『金葉和歌集』に一例（249）、『千載和歌集』に一例（978）使用例がある。

・山守はいはばいは南高砂の尾上の桜折てかざ、む（後撰）50

・葦引の山の山守もる山も紅葉せさする秋は来にけり（後撰）384

・世とともになげき樵り積む身にしあればなぞ山守のあるかひもなき（後撰）761

・山守よ斧のをと高くひゞく也みねの紅葉はよきてきらせよ（金

・人知れぬ大内山の山守は木隠れてのみ月を見るかな(『千載』978)
 なお『後撰和歌集』五〇番歌には「いはばいはなむ」という表現が見られるが、この場合の「いはば」は副詞ではなく動詞と見なされるので、本稿で問題としている副詞「いはば」とは別語と考えられる。

「たびびと(旅人)」

○イハヒ、旅人ノ一夜ノ宿ヲツクリ老タルカイコノマユライトナムガゴトシ。(六〇三⑩)

『古典対照語い表』所載の散文作品(『方丈記』以前)では、『源氏物語』に二例「たびびと(旅人)」が用いられているが、一例は『拾遺和歌集』の歌を踏まえた光源氏の会話文中の例、もう一例は和歌中の例である。

・「(略) 親なしに臥せる旅人とはぐくみ給へかし」とて(朝

顔・□二六三①)

cf. しながらや片岡山に飯に餓へて臥せる旅人あはれ親なし(『拾遺』1350)

・かざしおる花のたよりに山がつの垣根を過ぎぬ春の旅人(椎

本・四三四⑫)

『八代集総索引』によれば、『拾遺和歌集』に四例(326・342・886・1350)、『金葉和歌集』に一例(263)、『新古今和歌集』に三例(928・

・旅人の露払ふべき唐衣まだきも袖の濡れにける哉(『拾遺』326)
 ・潮みてるほどに行きかふ旅人や浜なの橋と名づけそめけん(『拾遺』342)

・旅人の萱刈り覆ひ作るてふまろやは人を思忘る、(『拾遺』886)
 ・しながらや片岡山に飯に餓へて臥せる旅人あはれ親なし(『拾遺』1350)

・三室山もみぢ散るらし旅人の菅のを笠に、しきをりかく(『金葉』263)

・み山路にけさやいでつる旅人の笠しろたへに雪つもりつ、(『新古今』928)

・夕日さす浅茅が原の旅人はあはれいづくに宿をとるらん(『新古今』951)

・旅人の袖ふきかへす秋風に夕日さびしき山のかげはし(『新古今』953)

右に挙げた用語は歌語であることが比較的明確なものであるが、これら以外にも「もののおふ(武士)」「ふぢのころも(藤衣)」「みづのあわ(水泡)」「たましき(玉敷)」等、歌語に類するものは他にも指摘できようかと思われる。しかも、このような歌語の使用は必ずしも特定の箇所に限らず、本文全体にわたって見られることから、単に鴨長明の使用語彙という問題にとどまらず、『方丈記』の

文体の特色の一つとして無視することはできないと思われる。

五 『方丈記』と『古今和歌集』仮名序との 文体の共通性

前項における検討により、『方丈記』の文体を構成する要素として、歌語が少なからず用いられていることが明らかとなったかと思われる。和文語、漢文訓読語とともに歌語が相応の重みをもつて用いられている『方丈記』の文体とは、どのような文体なのであろうか。

先に、『方丈記』における副詞「いはば」について、『古今和歌集』仮名序の影響を受けて用いられた語と推定されることを述べたが、改めて『方丈記』と『古今和歌集』仮名序の文章を比較してみると、意外に共通性のあることに気づかれる。

すなわち、両者とも、①和文語・②漢文訓読語・③歌語が交用され、④対句的表現が多用されているという共通点がある。もちろん、文章全体における各要素の比重という点では両者の間に相違が認められ、漢文訓読語の使用では『方丈記』がまさり、歌語の使用では『古今和歌集』仮名序がまさっている。とは言え、これら四つの文体的要素が同一文章中に存在し、それらが調和しながら統一的な文体を形成しているという両者の共通性については、『方丈記』の文体の内実を把握する上でも注目すべきことであろう。このような文体的共通性が『方丈記』と『古今和歌集』仮名序との間に認め

られる理由については、用語や文体において『古今和歌集』仮名序から『方丈記』への影響が想定されることが第一に挙げられよう。さらに言えば、両者の文章としての成立のあり方に共通性があることが関係しているのではないかと思われる。

『古今和歌集』仮名序は、古代中国における詩論（漢詩文）を参考にしながら、仮名文（和文）に和らげて書かれたと考えられており、その結果として、和文体を基調としながらも、漢文訓読語や対句的表現が用いられる文体が形成されたと考えられる。一方の『方丈記』は、四六駢儷体（漢詩文）で書かれた慶滋保胤の「池亭記」から、着想や表現において著しい影響を受けつつ叙述されたと考えられており、その結果として、和文語と漢文訓読語が交用され、対句的表現が多用される文体が形成されたと考えられる。すなわち、両者の成立の背景には漢詩文が存在しており、それが多少少なかられ文体の形成に影を落としているのではないかと思われる。

『古今和歌集』仮名序に歌語が用いられているのは、勅撰和歌集の序文でありかつ我が国最古の歌論とも言うべき文章であることからすれば当然とも言えよう。では、『方丈記』の場合はどのように考えることができるのであろうか。『方丈記』における歌語は、必ずしも『古今和歌集』仮名序に見られる歌語とは共通していないことから、直接的な用語の受容によって用いられているとは言い難い。もちろん、作者の鴨長明が歌人として著名な人物であり、歌語

が長明自身にとって馴染みのある用語であったということが大きいと考えられるが、それだけではなく、『方丈記』が漢詩文の影響のもとに書かれた文章であるという点が、歌語が用いられている要因の一つに挙げられるのではないだろうか。

漢詩文に類用される漢語（詩語）の中には、和語に読み替えられて日本語になったものが少なからず存しており（「白雪（しらゆき）」「黒髪（くろかみ）」「春風（はるかぜ）」「浮雲（うきぐも）」「白波（しらなみ）」等）、そのような漢詩文に由来する用語が歌語としても用いられるようになってきている。このことから考えると、漢詩文の影響を受けた文体と歌語とは意外に親和性が高いと考えられ、漢詩文の影響のもとに書かれた『方丈記』において歌語が用いられていることも、あながち不思議ではないと言えるのではないだろうか（ただし、言うまでもなく、歌語には漢語（詩語）に由来しないものも少なからず存在するため、へ漢詩文の影響を受けた文体と歌語との親和性）については、いまだ歌語全般に広げて考えることはできず、今後検討すべき課題である）。

なお、『方丈記』には漢字表記の「浮雲」「白波」が用いられているが、音読されたとすれば漢詩文に由来する詩語、訓読されたとすれば詩語に基づく歌語ということになる。

このように見てくると、『方丈記』の文体と『古今和歌集』仮名序の文体とは、和文調・漢文訓読調の程度に差はあるものの、成立

のあり方やその結果としての文体を構成する要素においては、少なからぬ共通性が認められるように思われる。

六 結 び

以上の検討・考察をまとめると、次のようになる。

(1) 『方丈記』に用例の認められる副詞「いはば」は、『方丈記』以前の文献には用例が極めて乏しく、和文語としても漢文訓読語としても一般的な用語ではなかったと考えられる。

(2) 今回の調査では、『方丈記』以前における副詞「いはば」の用例は六例認められたが、そのうちの四例が『古今和歌集』仮名序に用いられている。『古今和歌集』仮名序は、鴨長明作『無名抄』に、仮名文を書く場合の手本とすべき文献の一つとして挙げられており、鴨長明は、同仮名序の文章としての価値を高く評価していたことが知られる。

(3) 『方丈記』以前に用例の極めて乏しい副詞「いはば」が、『方丈記』への影響関係の想定される『古今和歌集』仮名序において用いられているということから、『方丈記』における「いはば」は『古今和歌集』仮名序の影響を受けて用いられている可能性が高いと思われる。

(4) 『方丈記』には、副詞「いはば」以外にも、『古今和歌集』仮名序と共通する表現が少なからず用いられていることから、『方

『方丈記』は、『古今和歌集』仮名序から用語や表現の使用に関して影響を受けていると見られる。

(5) 『方丈記』には、具体的な和歌を踏まえた結果として用いられた歌語の表現が認められるが、それとは別に、通常散文には用いられず基本的には和歌に用いられるはずの、いわゆる歌語が少なからず用いられている。『古今和歌集』仮名序にも、具体的な和歌を踏まえた歌語の表現やいわゆる歌語が用いられているが、『方丈記』におけるそれらの用語とは共通していない。すなわち、『方丈記』における歌語(的表現)の使用は、『古今和歌集』仮名序から直接的に用語を受容した結果ではなく、文体レベルの影響であつたと見られる。

(6) 『方丈記』と『古今和歌集』仮名序との間には、①和文語・②漢文訓読語・③歌語(的表現)が交用され、④対句的表現が多用されているという共通点があるが、その理由としては、『古今和歌集』仮名序から『方丈記』への、用語や文体レベルでの影響があつたことに加えて、両者ともに成立の背景に漢詩文の存在があつたことが関係していると考えられる。

『方丈記』は従来、文体史の流れの中で和漢混濁文の典型として位置づけられてきたが、本稿では、文体史の流れとは別に、時代も文章ジャンルも異なる『古今和歌集』仮名序からの個別的な影響があつたのではないかということを描した。

右のことが事実であるとすれば、『方丈記』の文体が文体史の中どのように位置づけられるのか、改めて問われることになろう。今後は、鴨長明の他の作品との比較等によつて、『方丈記』の文体における類型性と個別性を見極めていくことが必要となろう。

注

(1) 本文は、大曾根章介・久保田淳編『鴨長明全集』(貴重本刊行会、二〇〇〇年)所収の影印本を用いたが、適宜濁点と句読点を付した。

(2) 「いふ」の未然形に「ば」の付いた形のうち、動詞としての意味が明確で、文の成分として仮定条件を表す述部を構成している次のような用例は、副詞「いはば」に含めないこととする。

・イハムヤソノ前後ニシヌル物ヲホク、又河原白河西ノ京モロノ邊地ナドラクハヘテイハバ、際限モアルベカラズ。(五九八⑥)

・ソノ所ノサマヲイハバ、南ニカケヒアリ。イワラタテ、水ヲタメタリ。(六〇五⑧)

(3) 検索に用いた索引類は、以下の通りである。

有賀嘉寿子『今昔物語集自立語索引』(笠間書院、一九八二年)、東辻保和『打聞集の研究と総索引』(清文堂出版、一九八一年)、月本直子・月本雅幸『宮内庁書陵部蔵本宝物集総索引』(汲古書院、一九九三年)、山内洋一郎『古本説話集総索引』(風間書房、一九六九年)、増田繁夫(他)『宇治拾遺物語総索引』(清文堂出版、一九七五年)、峰岸明・王朝文学研究会『閑居友 本文並びに総索引』(笠間書院、一九七四年)、有賀嘉寿子『古事談語彙索引』(笠間書院、二〇〇九年)、安田孝子(他)『撰集抄自立語索引』(笠間書院、二〇〇一年)、泉基博『十訓抄 本文と索引』(笠間書院、一九八二年)、有賀嘉寿子『古今著聞集総索引』(笠間書院、

二〇〇二年)、深井一郎『慶長十年古活字本沙石集総索引 索引篇』(勉誠社、一九八〇年)、坂詰力治・見野久幸『保元物語総索引』(武蔵野書院、一九八一年)、坂詰力治・見野久幸『平治物語総索引』(武蔵野書院、一九七九年)、北原保雄・小川栄一『延慶本平家物語 索引篇上・下』(勉誠社、一九九六年)、金田一春彦・清水功・近藤政美『平家物語総索引』(学習研究社、一九七三年)、神原邦彦『水鏡 本文及び総索引』(笠間書院、一九九〇年)、小久保崇明『篁物語 校本及び総索引』(笠間書院、一九七〇年)、池田利夫『唐物語 校本及び総索引』(笠間書院、一九七五年)、鈴木一彦・猿田知之・中山緑朗『海道記総索引』(明治書院、一九七六年)、江口正弘・熊本女子大学国語学研究室・東関紀行 本文及び総索引』(笠間書院、一九七七年)、江口正弘『十六夜日記 校本及び総索引』(笠間書院、一九七二年)、辻村敏樹『とはずがたり総索引 自立語篇』(笠間書院、一九九二年)、時枝誠記『改訂版徒然草総索引』(至文堂、一九六七年)

(4) 『発心集』の本文は、新潮日本古典集成本(新潮社)を用いた。
(5) 検索に用いた索引類は、以下の通りである。

上坂信男『九本対照竹取翁物語語彙索引』(笠間書院、一九八〇年)、小久保崇明・山田瑩徹『土左日記 本文及び語彙索引』(笠間書院、一九八一年)、大野晋・辛島稔子『伊勢物語語彙索引』(明治書院、一九七二年)、塚原鉄雄・曾田文雄『大和物語語彙索引』(笠間書院、一九七〇年)、松尾聡・江口正弘『落窪物語総索引』(明治書院、一九六七年)、宇津保物語研究会『宇津保物語本文と索引』(笠間書院、一九七五年)、佐伯梅友・伊牟田経久『改訂新版 かげろふ日記総索引 索引編』(風間書房、一九八一年)、田中重太郎『校本枕冊子総索引 一・二』(古典文庫、一九六九―七四年)、池田亀鑑『源氏物語大成 四・六 索引編』(中央公論社、一九五三―五六年)、今西祐一郎(他)『紫式部日記語彙用例総索引』(勉誠

社、一九九七年)、東節夫・塚原鉄雄・前田欣吾『和泉式部日記総索引』(武蔵野書院、一九五九年)、東節夫・塚原鉄雄・前田欣吾『更級日記総索引』(武蔵野書院、一九五六年)、阪倉篤義・高村元継・志水富夫『夜の寝覚総索引』(明治書院、一九七四年)、塚原鉄雄・秋本守英・神尾暢子『狭衣物語語彙索引』(笠間書院、一九七五年)、池田利夫『浜松中納言物語索引』(武蔵野書院、一九六四年)、松村博司『栄花物語全注釈 八』(角川書店、一九八一年)、秋葉安太郎『大鏡の研究 上 本文編』(桜楓社、一九六一年)、神原邦彦・藤掛和美・塚原清『今鏡 本文及び総索引』(笠間書院、一九八七年)、ひめまつの会『八代集総索引 和歌自立語編』(大学堂書店、一九八八年)

(6) 『栄花物語』の本文は、日本古典文学大系本(岩波書店)を用いた。
(7) 『古今和歌集』仮名序の本文は、新編日本古典文学全集本(小学館)を用いた。なお、『古典対照語い表』では歌のみを対象としているため、『古今和歌集』仮名序の用例は対象外となっている。

(7) 平安時代の和文ならびに漢文訓読文、院政・鎌倉時代の仮名交じり文において、副詞「いはば」の用例が乏しいことについては、『日本国語大辞典 第二版』(小学館)「いわば」の「語誌」欄に、次のように記されている。元来、未然形「ば」で仮定を表す用法。漢文訓読ではふつう用いられず、中古では、「古今和歌集」の仮名序のほか用例が乏しく、「源氏物語」等の物語や日記類、「今昔物語集」などには例がない。中世では、もっぱら和文の流れを汲む論説的文体で用いられ、「ロドリゲス日本大文典」にも「例へば」、「物ならば」、「申さば」とともに「説明・比喩」の副詞として掲げられている。

さらに、同辞典における「いわば」項の末尾には、古辞書における「いはば」の記載が表示されていない(すなわち近世期までの古辞書に「いはば」の記載が見出されない)ことから、やはり漢文訓読では用いられ

ない語であったと推測される。

また、『時代別国語大辞典 室町時代編』（三省堂、一九八九～二〇〇一年）には、次のように記されている。

もと動詞「言ふ」の未然形に接続助詞「ば」の付いたもの。ある事態についての叙述を受けて、それと厳密には対比して言えない事であるのを、包括的、または仮説的に言おうとする場合に用いる。言ってみれば、しつて言うなら。「副詞の説明・比喩に属する語」イワバ、申サバ（大文典）「司馬遷ハ、武帝ノ時ニ著シ史記」タ者ヂヤホドニ、相去ルコト速モアルマイゾ。結句ハラサナウテ賈誼ヲ見タ事モアラウゾ。云ワハ、同時デ、チツトサキノ者デアアルヲ、其文章ヲ取テ」（史記抄四）なお、『時代別国語大辞典 上代編』（三省堂、一九九〇年）には「いはば」は掲出されていない。

- (8) 『無名抄』の本文は、篁瀬一雄『無名抄全講』（加藤中道館、一九八〇年）を用いたが、片仮名で翻字されている「ハ」「ミ」は平仮名に改めた。
- (9) 永積安明「文体における中世の成立―『平家物語』と『方丈記』をめぐって―」（『文学』二六―一〇、一九五八・一〇）、峰岸明「大福光寺本『方丈記』の文章における和漢の混淆について―和漢混淆文の文体分析に關する試案―」（『国語学論集』表現社、一九七六年）、浅見和彦「方丈記の文体―作品論への手掛かりとして―」（『文学』五二―一五、一九八四・五）、遠藤好英「方丈記」の文章―その史的位置と独自性への視点―」（宮城学院女子大学『日本文学ノート』二二、一九八七・一）等。
- (10) 永積安明『方丈記序論』（『中世文学論』同心社、一九五三年）等。
- (11) 稲田利徳『方丈記』の文体―歌語の措辞の融解―」（『国文学 解釈と鑑賞』五九―一五、一九九四・五）。

なお、注(9)の浅見文献では、歌語的表現は対句的構造の中に配置されており、本来的には対句になじまないとと思われる和語をあえて対句に仕

立て上げること、和文の新しい表現を獲得しようとしたのではないかと説かれている。

(12) 櫻井光昭「歌語の性格―古今和歌集を中心に―」（早稲田大学『国文学研究』七六、一九八二・三三）。本文献には、『方丈記』に用いられている歌語として、さらに「白波」^{シロなみ}「鄙」^{シノ}も挙げられているが、前者は漢語「白波」の可能性があり、後者は動詞の「鄙」^{シノ}（大福光寺本では活用語尾が脱落）と考えられるため、本稿では除外した。

(13) 『源氏物語』の本文は、新日本古典文学大系本（岩波書店）を用いた。

(14) 八代集の本文は、新日本古典文学大系本（岩波書店）を用いた。以下同。

(15) 『方丈記』における縁語的な表現としては、他に「所カハラチカケレバ、水難モフカク、白波（盗賊）の意」ノヲソレモサハガシ」（六〇三②）などを指摘することができる。

(16) 竹岡正夫『古今和歌集全評釈 上・下』（石文書院、一九七六年）、渡辺実『平安朝文章史』（東京大学出版会、一九八一年）第一章第三節「晴れのかな文―古今集仮名序」、小島憲之・新井栄蔵校注 新日本古典文学大系5『古今和歌集』（岩波書店、一九八九年）、片桐洋一『古今和歌集全評釈 上・中・下』（講談社、一九九八年）等。

〔付記〕

本稿は、平成二十三年度広島大学国語国文学会研究会（十一月二十七日）における口頭発表「方丈記」の用語と文体―副詞「いはば」の使用例が意味するもの―に基づき、修正を加えて成稿したものである。発表の席上では原卓志・土居裕美子・磯貝淳一各氏より、発表後には佐々木勇氏より、貴重な助言を賜った。記して感謝申し上げたい。

―あおき・たけし、徳島文理大学准教授―